

今塚遺跡の再検討とその性格について

植松 暁彦

1 はじめに

近年、発掘調査の増加に伴い山形盆地南半（古代出羽国最上郡）の奈良～平安時代の遺跡の様相が徐々に明らかになっている。筆者も本地域の遺跡調査に携わる機会を得、特に山形市北部の今塚遺跡では木簡、墨書土器等の官衙的な遺物が出土し、報告書において「遺跡の性格については（中略）文字資料等から推測して、一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落」と結んだ（須賀井・植松 1994）。

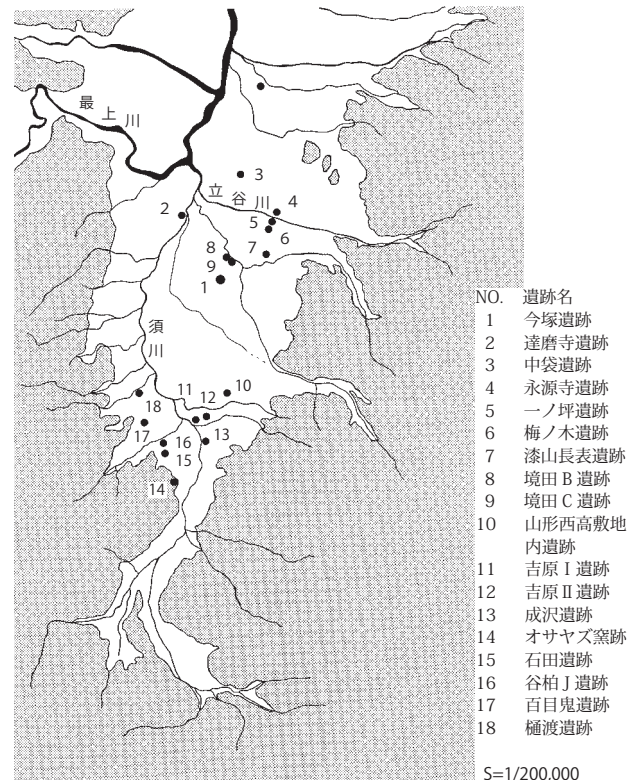
しかし、遺跡は遺構的には掘立柱建物跡で構成されるものの、規模や規格性に乏しく所謂官衙遺跡と呼ぶには躊躇がある。本稿では今塚遺跡の遺物や遺構を再吟味し、近年の調査で事例が増えた周辺遺跡の比較等も踏まえて、遺跡の性格や最上郡内に於ける位置付けを検討する。

2 研究史と土器編年

今塚遺跡は山形市北部の今塚地区に位置し、馬見ヶ崎川左岸の自然堤防（微高地）上に立地する。周辺には古墳時代の国指定史跡の嶋遺跡や特異な棟持柱建物が検出された長表遺跡が分布する（第1図）。調査では遺跡範囲の南半 7,800 m²が対象で、古墳時代前期の竪穴住居跡を主とする集落や河川跡、平安時代を主とする掘立柱建物や総柱建物跡、井戸跡、溝跡等が検出された（第15図）。

古代の遺物では溝跡から出土した①「仁寿三年」（853年）の郡符木簡や兵士の食糧支給等の木簡、②「生・一麗」等の同一字種の一括墨書土器、③「調所」の墨書土器、④「一等書生伴」の墨書ある人面土器が目撃された。

このうち①については報告書付編で平川南氏が検討を加え、本遺跡を「役所（性格不明）の一部」と考えている（平川 1994）。②については報文では祭祀的な遺物としたが、近年横山昭夫氏も陰陽道に関わる墨書土器として紹介した（横山 1998）。また、北村優季氏は「高」墨書土器の出土から関東地方「高麗」の移植民に関わる可

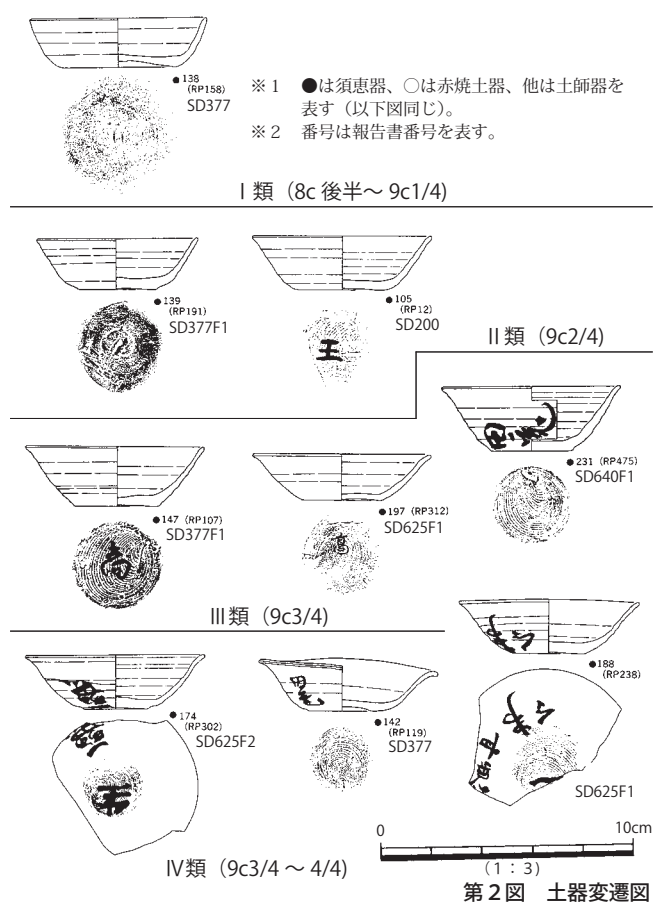


第1図 遺跡位置図

能性も言及している（北村 1997）。この他、報告書では本文中で主要な墨書土器に留めた釈文を山形県埋蔵文化財センターが中心に『山形県内出土古代文字資料集成』で報告書分の釈文を全て列記した。（尾形他 1998）。

また、伊藤邦弘氏と筆者は『山形県の官衙関連遺跡』の集成で、県内の官衙関連遺跡中でも上位に位置付け、後述する遺跡類型化を行った（伊藤・植松 1998）。同検討会では、山中敏史氏が③から国府関連の役所、④から郡書生の居宅の可能性を言及した（山中 1998）。

一方、遺物相については、報告書で一部「形態的に古い様相を示す」ものもあるが、①等から「出土土器は9世紀代が主体で10世紀まで下るものは認められない」と年代観をまとめた。佐藤庄一氏や阿部明彦氏・水戸弘美氏、筆者も各報告書等で、①が出土するS D 967と並走するS D 377溝跡の土器群に概ね9世紀中葉（9世紀第2～3四半期）の年代観をあて、当該期の基準資料としている。（植松 1997・佐藤他 1998・阿部他 1999）



第2図にはこれらに準拠して本遺跡で最も出土量の多い須恵器杯を基準に本稿における土器編年観を示した。

3 墨書土器の再検討

今塚遺跡では、古代の土器が溝跡等を中心に油脂箱で約50箱出土した。特にS D 625・377(S G 200)の溝跡からは多様な字種を含む墨書土器が一括して出土し、本遺跡の性格を考える上で多くの知見を与えてくれる(第3～5図。報告書追加再録)。報告書では事実記載に留めたものが多い墨書土器群について、再度検討を行う。

墨書土器については、報告書では主だったものを取り上げ、考察で「墨書文字・記号集成」を表した(第6図)。

本稿では、報告書作成当時は肉眼観察であったが、赤外線カメラ等を用い、一部報告墨書土器に修正加筆等を行い再録した(第7図)。また、報告書で掲載できなかった分も含め全ての墨書土器を集成(第11図)し、判読可能なものを表(第8～10図)にし、報告書未掲載の字種等を各字主な1点を実測(第12・13図)し、集成図(第14図)を作成した。

詳細は別稿に譲るが、これら集成表等からは、各遺構

毎に字種や時期に一定の傾向が窺えた。更に遺構毎に土器が集中出土した地点をプロットする事で、同一字種の偏りがある事等も分かった。以下に上記の墨書土器で遺跡の性格等を示唆する字種を取り上げ、概略を記す。

A 「生・一麗」関連の一括墨書土器群 S D 625の「22—32 Gに位置する窪地状の落ち込みに密集」し、「意識的に一括廃棄した状況」が看取られる墨書土器群で、「生・一麗」等の同一字種60個体以上が出土した(第3図)。報文では「一括出土状況から祭祀的な様相窺い知れる」とまとめた。

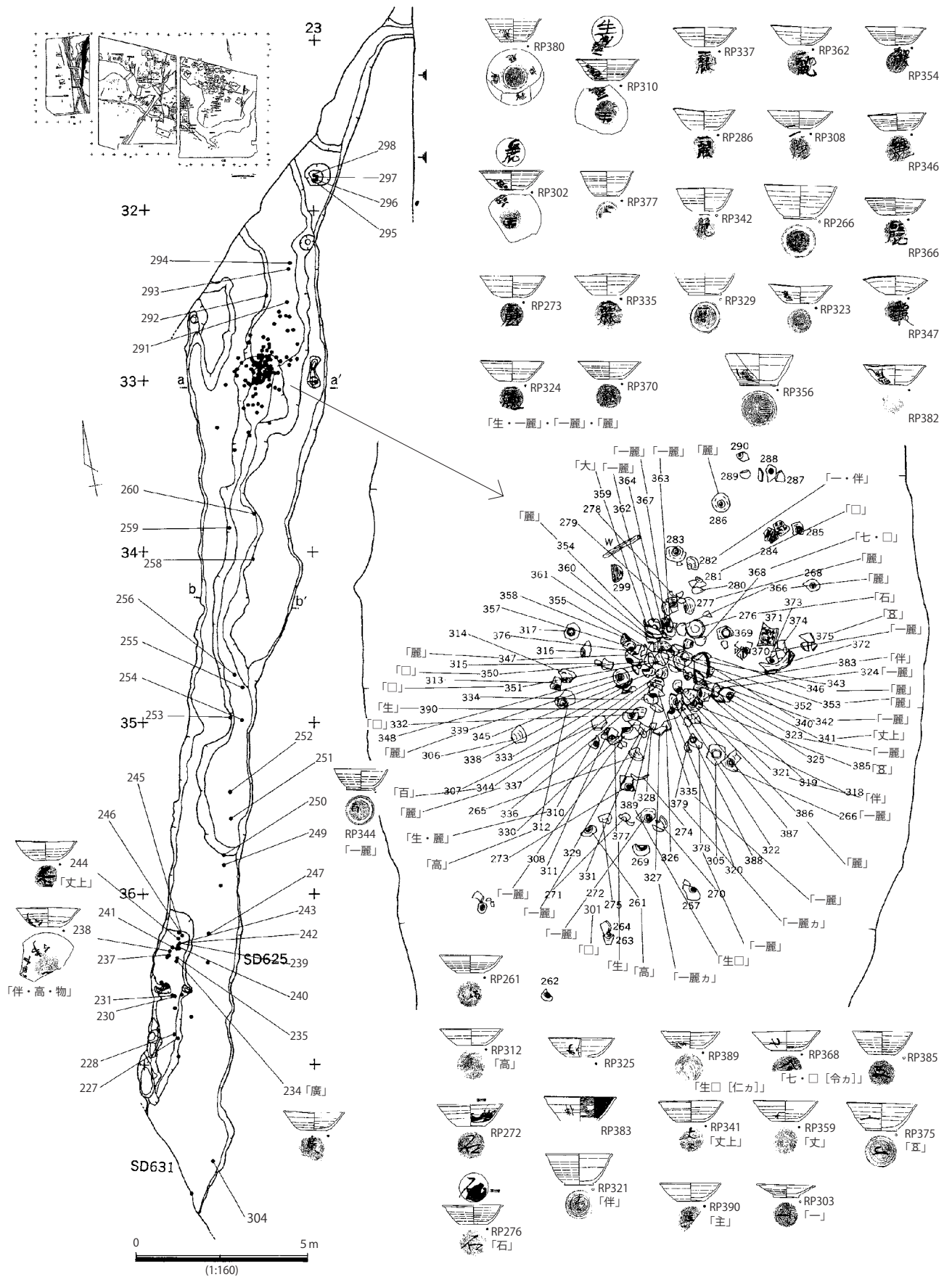
今回、再度字種の観察を行い幾つかの知見を得た。①同一字種にも字体により達筆な字体から崩し字、一部簡略化のもの等に分類可能で、②数量は前者が散見的で、後者ほど数量が多い(第6図)。③達筆な「麗」(第7図:報205)¹⁾上部を観察すると、一般的な「麗」ではなく「麗」で、所謂呪符(符録:水野1997)に類する字種の可能性があり、④須恵器高台付杯の器種に限られ、墨書部位も特異性が窺える(底部「生」・体部4面対「一麗」)。

これらを概観すれば、①と②から丁寧で達筆なものが少数手本(報205・紀3)として書かれ、それを複数人物が模写し崩れ一部字体が簡略化される状況が推測される。③と④からは見本となる報205等の特異性やその出自、使用法等について様々な示唆が得られる。

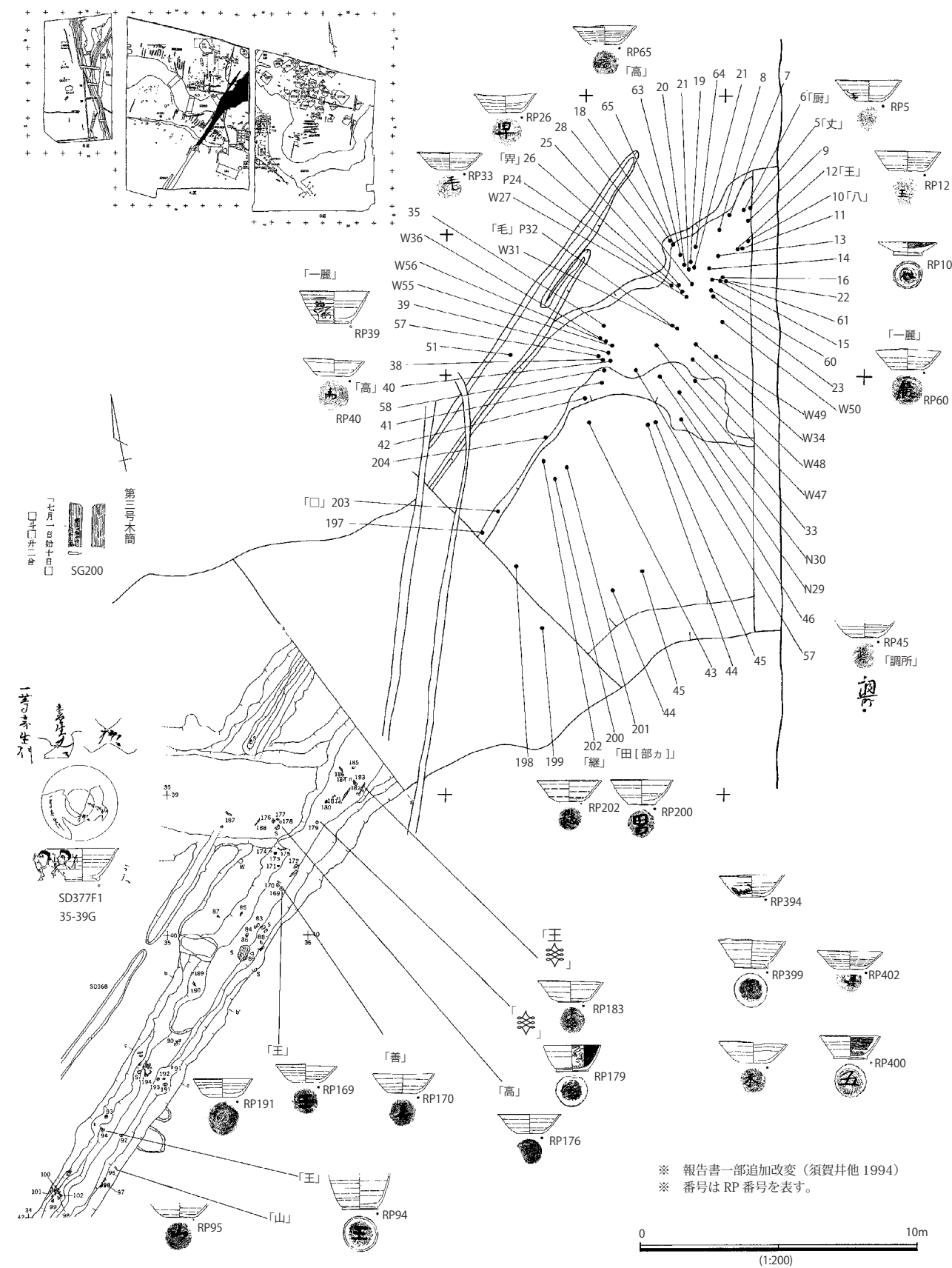
具体的な祭祀の内容については、字種自体の類例がなく判断に窮するが、近年研究が進む水辺祭祀の何らかの「禊・祓い」に関わる一例と考えたい。その理由は出土遺構が浅い溝跡で水辺に関わり、③の「生」を中心にした「一麗」の字種構成等が「人心や社会情勢の穢れを清浄化」を意味すると捉えるからである。更に一括廃棄状況や①の組成や偏りから少数の上位識者とそれ以外の集団により水辺で供物を捧げる供膳具として墨書土器が用いられ、使用後に一括廃棄(祓い)された状況が窺える。

B 「調所」銘の墨書土器 S G 200より出土し、古代税収の「調」を納めた「所」と推測される(第4・6図)。報告書では木簡や墨書土器と共に『「調所」や「書生」という文書作成に関する文字資料』から、遺跡の性格を「役所的な機能を備えた集落」とした。

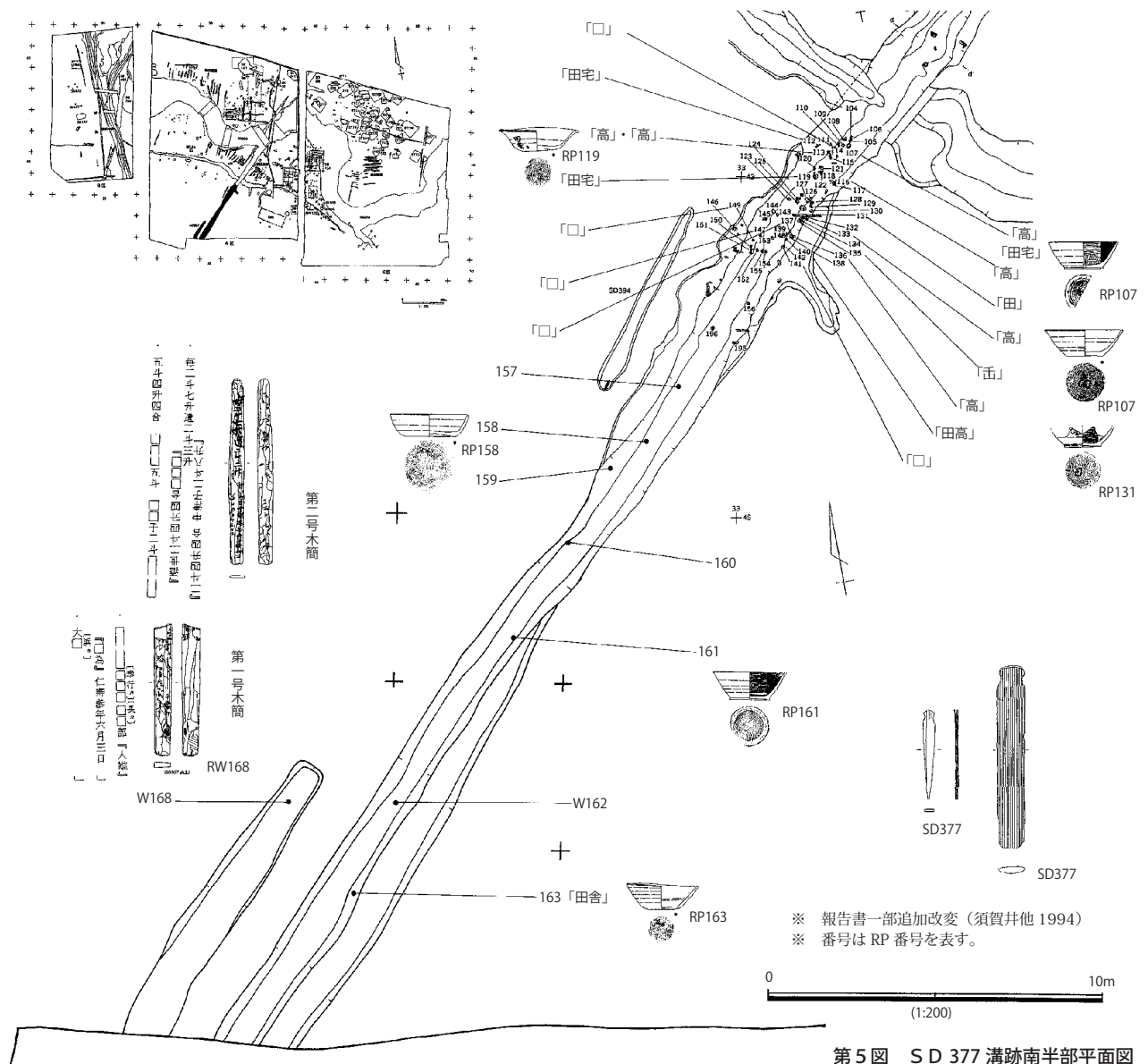
「調」は古代出羽国では狭布・米・穀の三種である。8世紀後葉からは、「調」が遠国に限られ蝦夷への夷禄に充てる等の理由から、隣国陸奥国と並び自国で利用



第3図 SD 625 溝跡平面図



第4図 S D 377 (S G 200) 溝跡北半部平面図



第5図 S D 377 溝跡南半部平面図

する他国には見られない規定が設けられる。また、S G 200 に連なる S D 377 (第4図：同一遺構の可能性)²⁾ では「田宅」(報239)や「田舎」(紀580)等の「田」と「宅」・「舎」の建物に関わる墨書土器の共伴、後述する米の支給に関わる郡符木簡の記述等と合わせて考えれば、出羽国の「調」の中でも米(白米・玄米)・穀(粃穀：佐藤1997)を収納管理した可能性が推測される。

C「一等書生伴」銘の墨書土器 S D 377 中央部から出土し、本稿で赤外線カメラで実測図に一部追加・修正し再録した(第4図)。外面に人面墨書と対側に墨書の一部、内面体部横位に「一等書生伴」、同部縦位に「□等書生丈部」、「□」の文字が確認できた。これらの文意は報文「文書作成に関わる文字資料」として留めた。

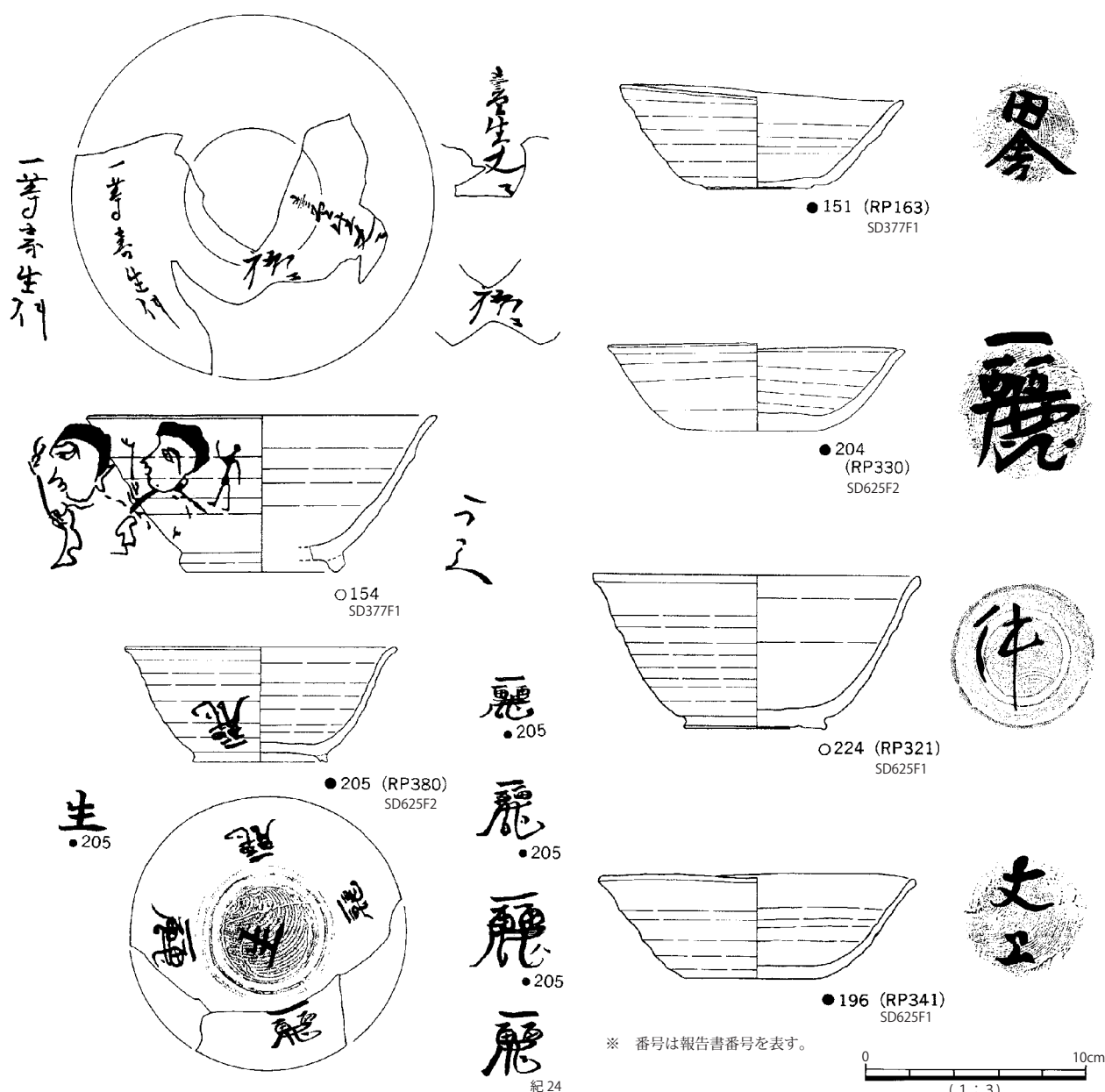
具体的には「一等／書生／伴(丈部)」と分けられる。

「一等」は『軍令』に官人の職務に応じた等級を付す規定があり最も高い等級にあたる³⁾。「書生」は、地方官人の職制で弘仁13年(822年)太政官符『郡雑人』に「郡書生」がみえる。郡書生は郡毎に規模に応じて定員が規定され(佐藤1997)、本遺跡の主体である9世紀中葉(863年：村山分郡以降)には、最上郡は8郷(『延喜式』)で『戸令』により中郡に相当し、規定では4名置かれる。

「伴」は「大伴」氏の弘仁年間(823年)の改名による姓名と推定され、最上郡では承和11(844)年「外従八位伴部道成」が「吉弥候」姓を賜り、元慶2年(878年)の元慶の乱で「擬大領伴貞道」が560名の兵と共に国府より秋田城に派遣された資料がある。これは当時の最上郡内に郡司クラスの在地勢力「伴」氏の存在を窺わせ、郡司以下の郡雑人「郡書生」にもこれら在地勢力の



第6図 報告書墨書文字・記号集成図



第7図 報告書修正図

出自者が関与していた事が推測される。本遺跡では他にも「伴」、「丈」の墨書土器が一定量出土し、土器群の年代(850年前後)的にも上記「書生/伴(丈部)」の墨書土器に関わるものと判断される。

一方、外面の面墨書は横向の二人の人物、後に線状に小人物が表される。前者の服装は頭に幘頭、服装は袖の長い衣袍を着用し、手に幣を持ちかざす様子が観察され、これらは官人層の仏教以外の宗教祭祀の行為を表現していると考えられる。また、内面の人名数等から描かれた官人が書生「伴」・「丈部」氏の可能性や、前述符録に類似する「麗」墨書（陰陽道系）との関連も窺える。

D木簡 S D 377 や併走する S D 967 から3点木簡が

出土した(第4・5図)。報告書付編で平川南氏が釈文と解説をまとめている。要約すれば、第1号木簡は、上から下の役所に宛てた下達文書(郡符木簡)で、「仁寿参(三)年六月三日」(853年)の紀年がある。何らかの役職「長」の「□部『人雄』」に宛てられ、『人雄』は自署と判断している。

第2・3号木簡は、古代の役所が食糧を兵士に支給した木簡で、具体的には「酒世」、「中津子」等の人名に、各々「二斗四升四合(240合)」前後の支給額(軍団兵士1日当たり米8合/約30日分)が記され、概ね兵士1年分(約30日勤務)の番上粮に相当するとしている。他に「毎二斗七升(+)遺二斗三升」(=5斗=1俵)の

墨書字種 (釈文) ※1	報告 番号 ※2	紀要 番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種 別	器種	残存率 ※3	墨書 部位 ※8	字体 規模 ※5	RP 番号 ※5	年代観 ※4	付着物 ※6	備 考 ※7
1生 一麗	205	528	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	小	生淡	380Ⅲ - IV		報告修正 接合
2生 一麗	173	529	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	中	濃	310Ⅳ		
3生 一麗	174	530	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中	淡	302Ⅳ		
4生 一麗		1	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	大	淡	Ⅳ		紀26接合
5生 一麗		2	SD625F 22-33	須恵器	坏	底完形	外底	中	淡	Ⅳ		
6生 一麗			SD625 3F1-F 2 22-33	須恵器	高台坏	底完形	外底	小	濃	Ⅲ - IV		紀25接合
7一麗		13	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
8一麗		15	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
9一麗		17	SD625F 22-32	須恵器	坏	半完形	外底	大		Ⅲ		
10一麗		20	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
11一麗		27	SD625F 22-32	赤焼土器	坏	底完形	外底	大		Ⅲ - IV	渋	
12一麗		23	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ	墨	
13一麗		22	SD625F 22-35	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ - IV		
14一麗		14	SD625F 22-3 6	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
15一麗		30	SD625F 22-37	赤焼土器	坏	体部片	外底	大		不明		
16一麗		28	SD625F	赤焼土器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
17一麗		12	SD625F1 22-34	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅲ		
18一麗		31	SD625F1 22-36	内黒土器	高台坏	体部片	外底	大		Ⅱ - Ⅲ		
19一麗		18	SD625 F1・F2	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
20一麗			SD625 7F1-F2 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
21一麗		29	SD625 F1-F2 22-33	赤焼土器	坏	底片	外底	大		Ⅲ	渋	
22一麗		8	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅳ		
23一麗		9	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ	渋	
24一麗 墨痕		10	SD625F2 22-32	須恵器	坏	半完形	外底	大		Ⅳ	渋	
25一麗		11	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅲ - IV	擦・渋	
26一麗		16	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ	煤	
27一麗		4	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大	363	Ⅳ		
28一麗		19	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ	墨	硯
29一麗		21	SD625F2	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV		
30一麗			5SD625	赤焼土器	高台坏	底片	外底	中	367	Ⅲ - IV	渋	
31一麗			6SD625	須恵器	坏	半完形	外底	大	378	Ⅳ	渋	
32一麗	182	539	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	大	362	Ⅳ		
33一麗	217	541	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外底	大	342	Ⅳ	渋	
34一麗	219	542	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外底	大	266	Ⅲ - IV		
35一麗	223	543	SD625F1	赤焼土器	坏	半完形	外底	大	329	Ⅲ - IV	渋	
36一麗	175	532	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中	淡	308Ⅳ	墨	
37一麗	176	533	SD625F2	須恵器	坏	底完形	外底	大	273	Ⅳ		
38一麗	177	534	SD625F2	須恵器	坏	底完形	外底	大	370	Ⅳ	渋	
39一麗	178	535	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大	286	Ⅳ		
40一麗	179	536	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大	335	Ⅲ	渋	
41一麗	180	537	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大	337	Ⅳ		
42一麗 □	181	538	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大	324	Ⅳ	渋	
43一麗	189	540	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中	323	Ⅳ		
44一麗	207	544	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大	356	Ⅲ	煤・朱	
45一麗	204	579	SD625	須恵器	坏	完形	外底	大	330	Ⅲ	擦・渋	報告修正
46一麗	101	513	SG200	須恵器	坏	完形	外底	大	60	Ⅲ	渋	
47一麗	116	514	SG200	赤焼土器	坏	半完形	外底	大	39	Ⅲ - IV		
48一麗		277	Ⅲ 22-37	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅳ	墨	
49一麗		278	Ⅲ 22-37	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ - IV	渋	
50一麗 □		330	SB 6 EB483F1	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
51麗		38	SD625F 22-32	赤焼土器	高台坏	底完形	外底	中		Ⅲ - IV		
52麗		37	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ		

墨書字種 (釈文) ※1	報告 番号 ※2	紀要 番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種 別	器種	残存率 ※3	墨書 部位 ※8	字体 規模 ※5	RP 番号 ※5	年代観 ※4	付着物 ※6	備 考 ※7
53麗		32	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大		277Ⅳ		
54麗		33	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	中		337Ⅳ		
55麗		34	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		339Ⅳ		
56麗		35	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		353Ⅳ		
57麗		36	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		386Ⅳ	渋	
58麗	183	545	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		347Ⅳ		
59麗 □	184	546	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		354Ⅳ	擦・渋	
60麗	185	547	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		346Ⅲ		
61麗	186	548	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		366Ⅳ	渋	
62麗	187	549	SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		382Ⅳ		
63〔麗力〕		42	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
64〔麗力〕		43	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
65〔麗力〕		49	SD625F 22-33	須恵器	坏	体部片	外底	中		不明		
66〔麗力〕		50	SD625F 22-33	須恵器	坏	体部片	外底	大		不明		
67〔麗力〕		47	SD625F 22-36	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV		
68〔麗力〕		46	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ - IV		
69〔麗力〕		48	SD625F	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV		
70〔麗力〕		40	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大	379	Ⅳ	渋	
71〔麗力〕		45	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ	墨	硯
72〔麗力〕		41	SD625F2 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
73〔麗力〕		39	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大	327	Ⅲ	擦・渋	
74〔麗力〕		44	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ - IV		
75□〔麗力〕	130		SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
76□〔麗力〕	145		SD625F 22-35	赤焼土器	坏	底片	外底	大		Ⅲ		
77□〔麗力〕	94		SD625F2	須恵器	坏	半完形	外底	中	332	Ⅳ		
78廣 一麗		76	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	中	濃	Ⅲ - IV	煤	未掲実測
79廣 麗		75	SD625	須恵器	坏	底片	外底	中	濃	Ⅳ		未掲実測
80廣		77	SD625 F1-F2 22-33	赤焼土器	高台坏	底片	外底	小		Ⅲ - IV	渋	
81廣	193	564	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外底	中		234Ⅳ		
82□〔廣力〕		212	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV		
83生		52	SD625F	須恵器	坏	体部片	外底	中		Ⅲ - IV		
84生		55	SD625 F・F 1 22-32	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅲ - IV		
85生		53	SD625F2 22-33	須恵器	坏	底完形	外底	中		Ⅳ		
86生		51	SD625F2	須恵器	坏	体部片	外底	小	365	Ⅲ		
87生		54	SD625	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
88生	206	531	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	小	377	Ⅲ - IV		
89生		284	Ⅲ 40-37	須恵器	坏	体部片	外底	小		不明		
90田舎	151	580	SD377	須恵器	坏	完形	外底	中	163	Ⅳ		報告修正
91田〔舎力〕	189		SD377F1 34-43	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅲ		
92□〔田舎力〕		98	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	大	淡	Ⅳ	墨	硯
93舎 □		191	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中	淡	Ⅳ		未掲実測
94田宅 真	239	577	Ⅲ 36-47	内黒土器	坏	半完形	外底	小	濃	Ⅳ		
95田宅	103	516	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		394Ⅳ		
96田宅 □		180	SD377F1 34-42	赤焼土器	坏	底片	外底	小		Ⅳ		
97田宅		177	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅱ - Ⅲ		
98田宅		178	SD377F1	須恵器	坏	体部片	外底	中		不明		
99田宅		182	SD377F1	赤焼土器	坏	底片	外底	小		不明		
100田宅		179	SD377	赤焼土器	坏	底片	外底	小		112Ⅲ - IV		
101田宅		181	SD377	赤焼土器	坏	底完形	外底	小		140Ⅳ	渋	
102田宅	142	502	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	小		119Ⅳ	煤	
103田宅	231	572	SD640F1	須恵器	坏	半完形	外底	中	475	Ⅲ - IV	渋	
104田宅		262	Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ	渋	
105田宅		266	Ⅲ 33-42	赤焼土器	坏	底片	外底	中		Ⅳ		
106田宅		263	Ⅲ 42-41	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV	渋	
107田宅		264	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅳ	擦	
108田宅		265	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ - IV		
109田宅		195	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	中	114	Ⅳ		
110宅		328	SB1EB4	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅱ - Ⅲ		
111宅		199	SD377F1 34-32	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV	渋	
112宅		202	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ		
113□〔宅力〕	219		SD377F1 34-42	赤焼土器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV		
114□〔真力〕	197		SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ		
115田高		80	SD625F2	内黒土器	高台坏	底片	外底	小		Ⅱ		
116田高	212	556	SD625F1	内黒土器	坏	底片	外底	小	107	Ⅱ		

第8図 墨書土器釈文表（1）

	墨書字種 (釈文) ※1	報告 番号 ※2	紀要 番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種 別	器種	残存率 ※3	墨書 部位 ※8	字体 規模 ※8	字体 濃淡 ※5	R P 番号 ※5	年代観 ※4	付着物 ※6	備 考 ※7
117	田高			267Ⅲ 40-37	須恵器	高台坏	底片	外体	中			Ⅲ - IV		
118	田高			190SD377	内黒土器	坏	底完形	外底	小	濃淡	131	Ⅱ - Ⅲ		未掲実測
119	[田高力]			302Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - IV		
120	昇	102	525	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	大		26	Ⅲ	墨	硯
121	田□ [部力]		270	Ⅲ 31-44	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ		
122	田		287	Ⅲ 42-38	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ		
123	[田力]		300	Ⅲ 34-42	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
124	上高		268	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		未掲実測
125	上		193	SD377F1	内黒土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV		
126	高下 一		206	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	大	濃	137	Ⅳ	墨	硯 未掲実測
127	下 高		269	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外体	小	濃		Ⅲ - IV		
128	高		58	SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV	渋	
129	高		59	SD625F 22-33	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
130	高		61	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
131	高		56	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ		
132	高		57	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅳ		
133	高		60	SD625	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅳ		
134	高	197	557	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	小		312	Ⅲ - IV		
135	高	198	558	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	小		261	Ⅲ - IV	墨	硯
136	高	84	571	SE181	須恵器	坏	底完形	外底	小		80	Ⅲ	煤	
137	高	112	517	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		399	Ⅲ - IV		
138	高	104	518	SG200	須恵器	坏	完形	外底	中		40	Ⅲ	渋	
139	高	108	519	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中		65	Ⅲ - IV	煤	
140	高		174	SD377F 34-43	赤焼土器	坏	体部片	外体	中			不明		
141	高		170	SD377F	内黒土器	高台坏	底片	外底	小			Ⅱ		
142	高		172	SD377F1 33-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - IV		
143	高		168	SD377F1 34-42	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	渋	
144	高 □		169	SD377F1 34-42	須恵器	坏	底片	外体	中	淡		Ⅲ	墨	
145	高		167	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	中			Ⅲ	煤	
146	高		173	SD377F1	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	渋	
147	高		175	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	擦	
148	高		176	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - IV		
149	高	146	503	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中		176	Ⅳ	渋	
150	高		163	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	小		116	Ⅲ	煤	
151	高		164	SD377	須恵器	坏	底片	外底	中		113	Ⅲ - IV		
152	高		165	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	中		113	Ⅲ - IV		
153	高		166	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	大		136	Ⅲ - IV	渋	
154	高		171	SD377	須恵器	高台坏	底完形	外体	中		133	Ⅲ		
155	高	147	504	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	中		107	Ⅲ		
156	高		255	Ⅲ 32-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
157	高		254	Ⅲ 32-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
158	高		245	Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	煤	
159	高		243	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
160	高		249	Ⅲ 33-43	須恵器	坏	体部片	外体	中			不明		
161	高		259	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	煤	
162	高		260	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
163	高		261	Ⅲ 33-43	赤焼土器	坏	底片	外底	小			Ⅲ		
164	高		251	Ⅲ 34-42	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ	擦	
165	高 □		252	Ⅲ 40-43	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅳ	墨	
166	高		242	Ⅲ 40-45	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ		
167	高		250	Ⅲ 41-44	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV	擦	
168	高		253	Ⅲ 42-40	須恵器	坏	底完形	外底	中			Ⅳ		
169	高		246	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ - IV		
170	高		257	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底完形	外底	小			Ⅲ - IV	煤	
171	高		258	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅳ	煤	
172	高		256	Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅱ - Ⅲ		
173	高 □		244	Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底片	外体	中	淡		Ⅳ	渋	
174	高		248	Ⅲ 43-40	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ - IV		
175	高		247	Ⅲ 47-38	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV		
176	高		319	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV	墨	
177	高		320	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	渋	
178	高		321	X-0	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	煤	
179	高		322	X-0	須恵器	高台坏	底完形	外底	中			Ⅲ - IV		
180	□ [高力]		314	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ	墨	硯
181	□ [高力]		211	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅲ - IV		
182	□ [高力]	148	512	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ	渋	
183	一等書生伴 □	154	501	SD377	赤焼土器	坏	底片	外体	小			Ⅲ - IV	墨	報告修正
184	伴高物 □	188	550	SD625F1	須恵器	坏	底片	外体	中	淡	238	Ⅲ - IV	煤	
185	伴 一		67	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	中	淡	282	Ⅳ	擦	
186	□ [一伴力]		104	SD625F	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅲ		
187	伴		62	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外体	小		247	Ⅳ	擦、渋	

墨書字種 (釈文) ※1	報告 番号 ※2	紀要 番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド	種 別	器種	残存率 ※3	墨書 部位 ※8	字体 規模 ※5	字体 濃淡 ※5	R P 番号 ※5	年代観 ※4	付着物 ※6	備 考 ※7
188	伴		63	SD625F 22-32	須恵器	坏	体部片	外体	中		不明		
189	伴		64	SD625F	須恵器	坏	体部片	外体	小		不明	渋	
190	伴		65	SD625F 22-32	赤焼土器	坏	底片	外体	小		Ⅲ		
191	伴		66	SD625F	赤焼土器	坏	体部片	外体	小		不明		
192	伴	202	551	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	中	325	Ⅳ		
193	伴	224	552	SD625F1	赤焼土器	坏	底完形	外底	中	321	Ⅱ・Ⅲ	擦、渋	報告修正
194	伴	211	553	SD625F2	内黒土器	坏	体部片	外体	中	383	Ⅲ・Ⅳ		
195	丈上	190	554	SD625F1	須恵器	坏	完形	外底	中	244	Ⅳ	煤	
196	丈上	196	555	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	中	341	Ⅳ		報告修正
197	丈		78	F1-F2 22-33	須恵器	坏	底片	外体	小		Ⅲ・Ⅳ		
198	丈		79	SD625F 22-33	赤焼土器	坏	底完形	外底	小		Ⅳ		
199	丈	107	523	SG200	須恵器	坏	半完形	外体	小	5	Ⅳ	擦、渋 煤	
200	王 □□	238	574	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	半完形	外底	中	濃 淡	Ⅲ・Ⅳ	墨	硯・習字
201	王		72	SD625F 22-37	須恵器	高台坏	底片	外底	小		Ⅲ・Ⅳ		
202	王		73	SD625F 22-37	須恵器	坏	底完形	外底	中		Ⅲ・Ⅳ	墨	硯
203	王		74	SD625F 22-32	須恵器	蓋	半完形	外体	小		Ⅱ・Ⅲ		
204	王	105	522	SG200	須恵器	坏	底片	外底	小	12	Ⅱ・Ⅲ	渋	
205	王		185	SD377F1	須恵器	坏	底完形	外底	中		Ⅱ		
206	王		186	SD377F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅱ	煤	
207	王	141	505	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	大	169	Ⅲ・Ⅳ		
208	王	152	506	SD377	須恵器	坏	半完形	外底	大	94	Ⅱ・Ⅲ		
209	王	275	Ⅲ 42-40	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅱ・Ⅲ	渋	
210	王	276	Ⅲ 35-40	須恵器	坏	底片	外底	小			Ⅱ	擦	
211	王	240	575	Ⅲ 31-44	内黒土器	坏	外底	中			Ⅱ		印刻
212	王	237	576	38-35	須恵器	蓋	半完形	外体	小		Ⅱ・Ⅲ	墨	硯
213	王		205	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	小	147	Ⅲ		
214	王 ✱	144	508	SD377F2	須恵器	坏	半完形	外底	小	183	Ⅳ		
215	善		88	SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ		
216	善	109	524	SG200	須恵器	坏	底片	外底	中	402	Ⅳ		
217	善	149	507	SD377F1	須恵器	坏	半完形	外底	中	170	Ⅳ		
218	善		279	Ⅲ 42-41	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ		
219	善		204	SD	須恵器	坏	底完形	外底	中	141	Ⅲ・Ⅳ	擦、煤	
220	善		326	X-0	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ・Ⅳ	渋	
221	主	199	565	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	小	390	Ⅲ・Ⅳ	渋	
222	主	285	Ⅲ 32-42	須恵器	高台坏	底完形	外底	小			Ⅲ・Ⅳ	擦	
223	貞	271	Ⅲ 42-34	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅲ・Ⅳ		未掲実測
224	貞	272	Ⅲ 32-44	赤焼土器	坏	底片	外底	中			Ⅳ		
225	毛		84	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ・Ⅳ	渋	
226	毛	110	521	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	中	33	Ⅳ	渋	
227	石		82	SD625F2 21-36	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅳ		
228	石	192	559	SD625F1	須恵器	坏	完形	外底	大	272	Ⅲ・Ⅳ	漆	
229	石 石	191	560	SD625F1	須恵器	坏	半完形	外底	大	濃 濃	276	Ⅲ・Ⅳ	
230	石		309	Ⅲ 32-42	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅲ・Ⅳ	渋	
231	石		290	Ⅲ 33-43	須恵器	高台坏	底片	外底	大		Ⅲ・Ⅳ		
232	西		81	SD625F1	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ		刻 未掲実測
233	西		192	SD377F1 34-42	須恵器	坏	半完形	外底	中		Ⅲ・Ⅳ	擦、渋	
234	山		194	SD377	須恵器	坏	底完形	外底	大	95	Ⅲ	擦、渋 煤	
235	山口	95	573	SK901	須恵器	坏	底片	外底	小	淡	494	Ⅲ・Ⅳ	
236	一		91	SD625F1	内黒土器	高台坏	底完形	外底	中		Ⅳ		
237	一	226	568	SD625F2	赤焼土器	Ⅲ	底完形	外底	中	303	Ⅲ		
238	一	227	569	SD625F2	赤焼土器	Ⅲ	半完形	外底	中		Ⅲ	煤	
239	一	200	570	SD625F1	須恵器	坏	底完形	外体	中	257	Ⅳ	渋	
240	五	117	526	SG200	赤焼土器	坏	半完形	外底	大	400	Ⅱ		
241	七 □	194	567	SD625F2	須恵器	坏	底片	外底	中	濃 濃	368	Ⅲ・Ⅳ	擦、渋
242	八	227	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅰ・Ⅱ	擦、渋	
243	八	228	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅱ		
244	八	229	SG200F1	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅱ		
245	八	230	SG200F2	須恵器	高台坏	底完形	外底	小			Ⅲ・Ⅳ		
246	八	231	SG200F2	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅱ		
247	八	121	527	SG200	内黒土器	坏	半完形	外底	中	10	Ⅲ・Ⅳ		
248	八	183	SD377F1	須恵器	坏	底完形	外底	大		201	Ⅱ		
249	八	184	SD377F1 35-39	須恵器	坏	底片	外底	大			Ⅳ		
250	百		90	SD625F2	須恵器	高台坏	底完形	外底	小	344	Ⅲ・Ⅳ	墨	硯 未掲実測
251	調所	111	515	SG200	須恵器	坏	半完形	外底	小	46	Ⅲ・Ⅳ	渋	
252	守	195	563	SD625	須恵器	坏	完形	外体	小	389	Ⅲ	擦	
253	生		85	SD625F 22-36	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅱ・Ⅲ	擦	未掲実測
254	神	233	SG200F3	須恵器	坏	底片	外底	中			Ⅰ・Ⅱ		未掲実測

墨書字種 (釈文) ※1	報告 番号 ※2	紀要 番号 ※2	遺構番号 層位 グリッド ※3	種 別	器種	残存率 ※3	墨書 部位 ※8	字体 規模 ※5	字体 濃淡 番号 ※5	R P	年代観 番号 ※4	付着物 ※6	備 考 ※7
255雀			280Ⅲ 27-41	須恵器	坏	半完形	外底	小		Ⅲ - IV			未掲実測
256繭			232SG200F2	須恵器	坏	半完形	外底	大		202Ⅳ			未掲実測 SD377 合
257米	106	520SG200F1		須恵器	坏	半完形	外底	中		Ⅳ			
258易			281Ⅲ 34-42	須恵器	高台坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV			未掲実測
259甲			323X-0	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ	擦		未掲実測
260良			83SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外体	大		Ⅳ	擦、渋		未掲実測
261矢 矢			87SD625F	須恵器	蓋	半完形	外体 摘	小	淡 淡	Ⅲ	墨		硯 未掲実測
262有			293Ⅲ 31-42	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV			未掲実測
263皿 □			218SD377	赤焼土器	坏	底完形	外底 外体	中		Ⅲ - IV	墨		未掲実測
264大	201	566SD625F2		須恵器	坏	完形	外体	小		359Ⅲ - IV	墨、渋	硯	
265十			86SD625F	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅳ	渋		
266尔※			282Ⅲ 32-44	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅲ - IV			未掲実測
267□ [尔カ] ※			207SD377	須恵器	坏	底完形	外底	中		149Ⅳ			
268市			187SD377F1 33-42	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅲ	渋		則天 未掲実測
269市			188SD377	須恵器	坏	半完形	外底	大		135Ⅲ	擦、渋 煤		則天
270市			273Ⅲ 42-42	須恵器	坏	底完形	外底	大		Ⅲ			則天
271市			274Ⅲ 33-42	須恵器	坏	底片	外底	大		Ⅲ	渋		則天
272■ □ [カ]	158	509SD377F1		内黒土器	坏	半完形	外底	小		179Ⅱ			記号
273□ [カ]			226SD377F1	内黒土器	高台坏	底片	外底	中		Ⅱ			記号
274𪛗 𪛗	218	561SD625F2		赤焼土器	坏	半完形	外底 外体	中	濃 濃	385Ⅲ - IV			記号
275𪛗 𪛗	225	562SD625F		赤焼土器	高台坏	底完形	外底 外体	大	淡 淡	375Ⅱ - Ⅲ			記号
276𪛗			68SD625F 22-32	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ			記号
277𪛗			69SD625F 22-37	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV	墨		記号
278𪛗			70SD625F 22-32	赤焼土器	坏	体部片	外体	大		不明	墨		記号
279𪛗			71SD625F	赤焼土器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV			記号
280○			89SD625F 22-35	須恵器	坏	底片	外底	小		Ⅲ - IV			記号 未掲実測
281○			289Ⅲ 42-43	須恵器	坏	底完形	外底	中		Ⅳ	擦		記号
282□ [○カ]			106SD625F	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅲ - IV	墨		記号・硯
283∞			283Ⅲ 35-40	須恵器	坏	底片	外底	中		Ⅳ			記号 未掲実測
284×	232	578SD640F1		赤焼土器	坏	完形	外底	中		473Ⅳ	煤		印刻

- ※1 釈文のカギ括弧は破片で推定したもの。□は墨痕が薄いが判読したものを表す。
※2 報告番号は報告書番号を表す。紀要番号は本稿紀要番号を表す。
※3 残存率は底部を主に墨書の有無を判断するもので、完形は底体部ほぼ残存。半完形は底部残存体部一部欠損。底完形は底部残存体部欠損。底片は底部欠損を表す。
※4 年代観は「第2図土器変遷図」に従う。
※5 字体規模は墨書字体全体の相対的な大中小、字体濃淡は部位や字体複数の場合の相対的濃淡を表し、同一字種の場合は部位を表す。
※6 内面底部を主に明らかな付着物等を表し「墨」は墨汁、「漆」は漆、「煤」は煤、「渋」は渋状の付着物、「擦」は明瞭な摩擦痕跡等が認められるものを表す。
※7 「報告修正」は報告書修正図(第7図)、「未掲実測」は未掲載墨書土器実測図(第12・13図)を表す。硯は墨汁や擦痕跡等から明らかに転用硯と考えられるものを表す。
※8 外・内は外面・内面、底・体は底部・体部を表す。

第10図 墨書土器釈文表(3)

墨書字種	出土遺構								計	全字 種数 ※1	全文 字数 ※1	墨書部位※2				計 ※3
	S D 625	S D 377	S G 200	S B 2	S E S K	Ⅲ層 他	その 他					外底	外体	内底	内体	その 他
判読可能土器	137	56	22	2	4	59	5	285	67	54	247	58	4	3	4	316
判読不明(□)	66	19	8	3	27	123					90	34	1	2		127
計	203	75	30	5	4	86	5	408			337	92	5	5	4	443
組成率(%)	49.8	18.4	7.4	1.2	1.0	21.1	1.2	100			76.1	20.8	1.1	1.1	0.9	100

- ※1 全字種数は1文字や複数文字、記号も含めた文字の種類数を表し、全文字数は使用される文字(漢字)や記号の数を表す。
※2 外・内は外面・内面を表し、底・体は底部・体部を表す。
※3 1個体に複数文字が、部位が異なり墨書されるため数量が異なる。

第11図 全墨書土器概要表

支出残高を記す公粮支給に関する記述も注目している。

先学の文献史から本遺跡主体の9世紀中～後葉の出羽国軍制を概観すれば、1戸正丁の1/3を徴兵した出羽軍団兵士1,000人(弘仁六年〔815年〕私糧、後番上粮8合〔穀・米〕／日)と、諸郡からの鎮兵650人(長上粮1升6合〔穀・米〕／日)、弘仁年間に設置された健児880人(列士：出挙稻健児糧料5,8412束〔穎稻〕／年)

の計2,530人が公粮を支給される本来の主な兵力で1府2城(秋田城・雄勝城)に配置されていた。

しかし、9世紀後葉の元慶の乱(878年)の翌年出羽権守藤原保則は「承前国司、无置一人」と上奏し、実際には同乱以前に「列兵」がほとんど置かれなかった状態が続いた事が窺える。

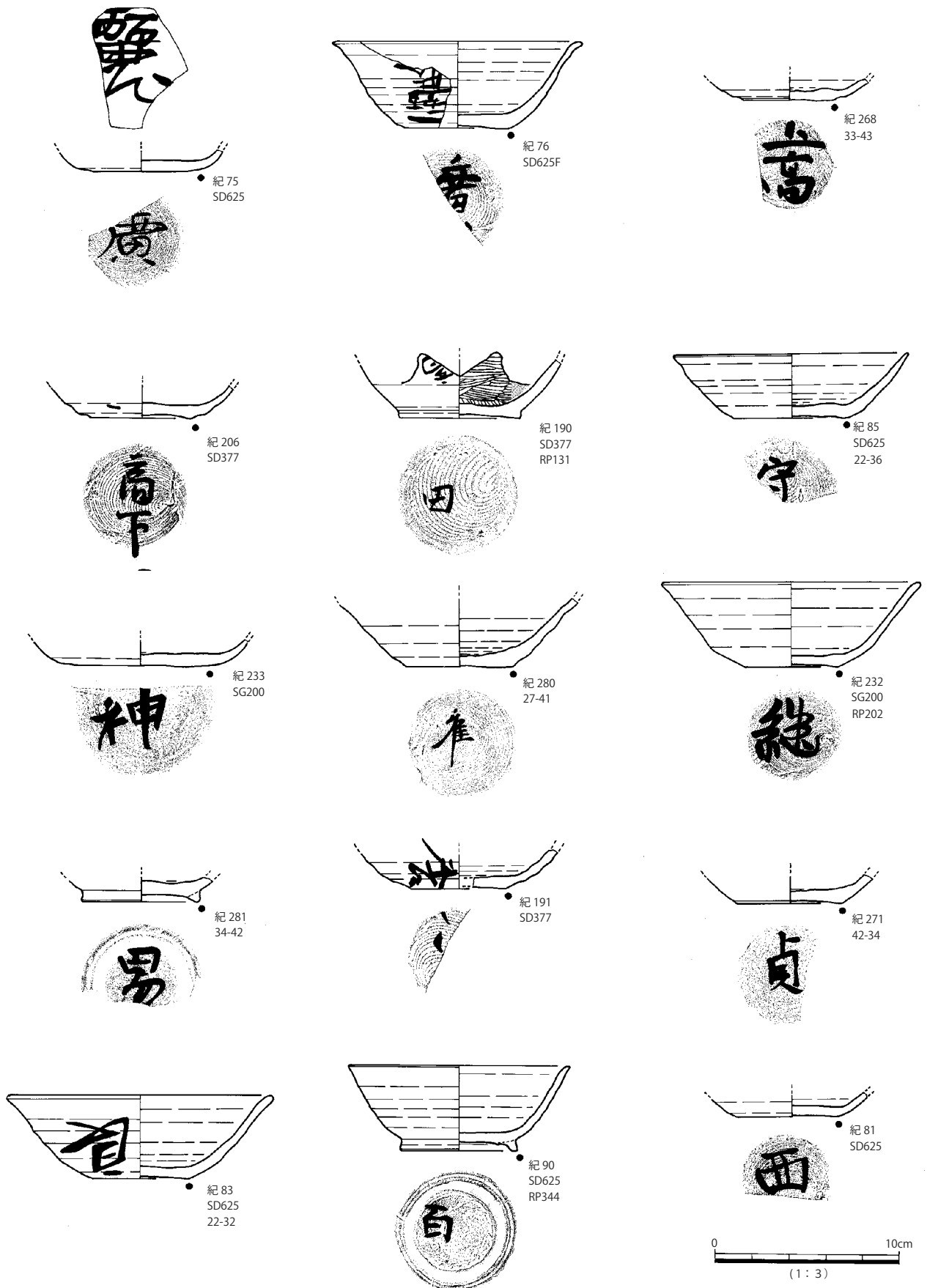
これら上記の木簡の存在は、本遺跡が木簡(郡符木簡)の差出し、受取りに関わる遺跡か、それと同レベルの木簡が廃棄されうる遺跡と推測される。更に第2・3号木簡は、前述記事を勘案すれば、同乱前後の社会的緊張に起因する事も推測され、共伴する新相の土器群(Ⅳ期)と対応するであろう。また、5斗1俵を基準とする公粮は、この木簡記載段階では既に春米化され運搬に適した単位や状態で保管収納されていた可能性もあり、後述する倉庫の形態とも合わせ、報文で平川氏が指摘する「当時の役所(性格不明)の一部」の可能性が強く窺える。

4 検出遺構の再検討

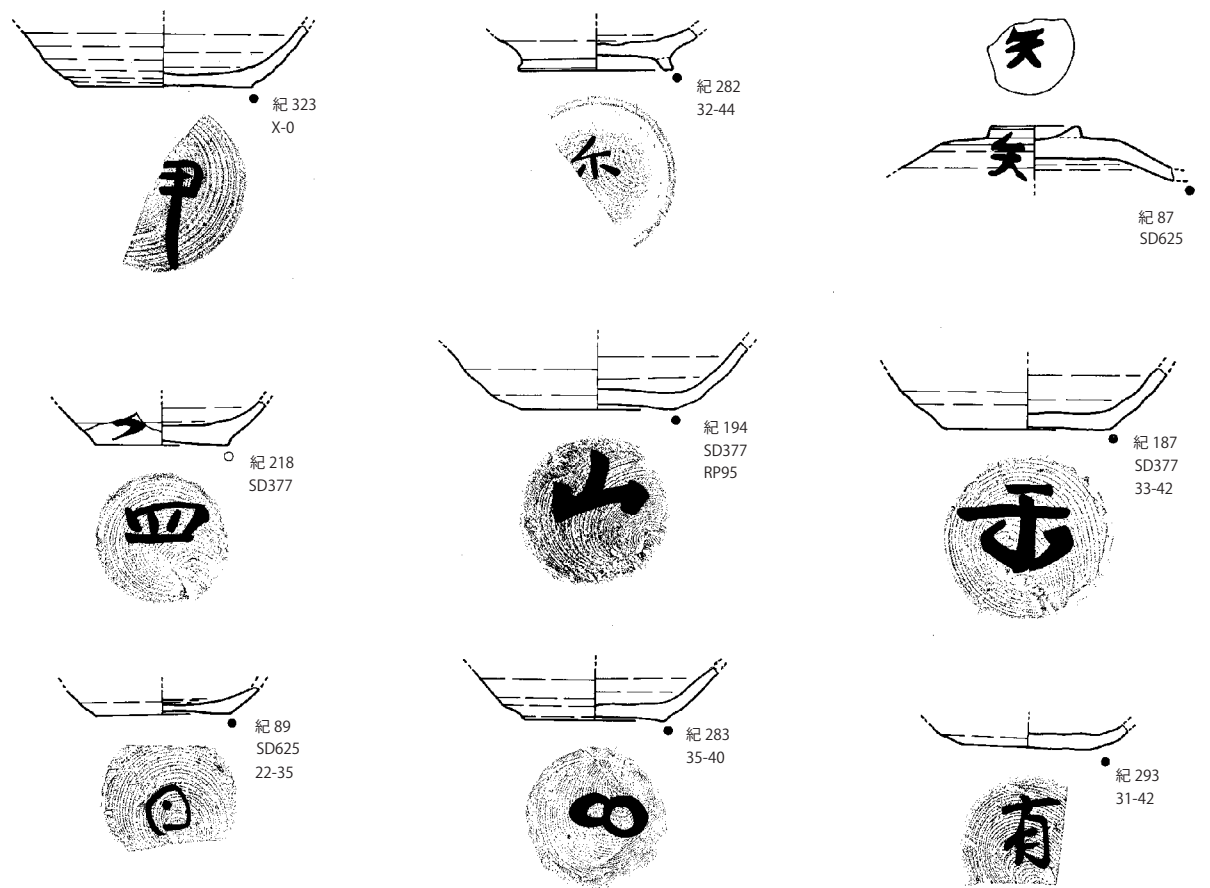
本遺跡では10棟⁴⁾の掘立柱建物跡(以下、建物と記す)が検出され、一部3時期の重複関係もあるが「他の建物を含め(中略)より近接した年代代での変遷」とし、「時期幅も9世紀内に納まる」ものとした。本遺跡は当該地域(最上郡内)の一般集落に多く見られる竪穴住居(1982 渋谷)がなく、建物跡だけで構成される。しかし、前述『山形県の官衙関連遺跡』では、文字関係資料が出土する遺物状況は官衙的様相を示すのに比べ、「遺構の規模、配置等に計画性はみられない」特徴を指摘する。

近年、本遺跡のある古代最上郡内の調査例の増加から遺跡相互の比較等が少しづつ可能になっている。本稿では総柱建物を高床倉庫と判断し、梁行に比して桁行が5間以上の長大な建物を所謂長舎建物と称し、本遺跡で特徴的な総柱建物(S B 2)や長舎建物(S B 3)の形態(間尺)に注目した。そして、同郡内で面的な調査により上記建物が検出される遺跡を集成(第1・18・19図)し、主な遺跡(限定された調査区で全体不明確を除く)の建物形態や構成等から分類(第15～17図)を行い、建物形態と規模の比較分布図(第20図)を作成した^{5・6)}。

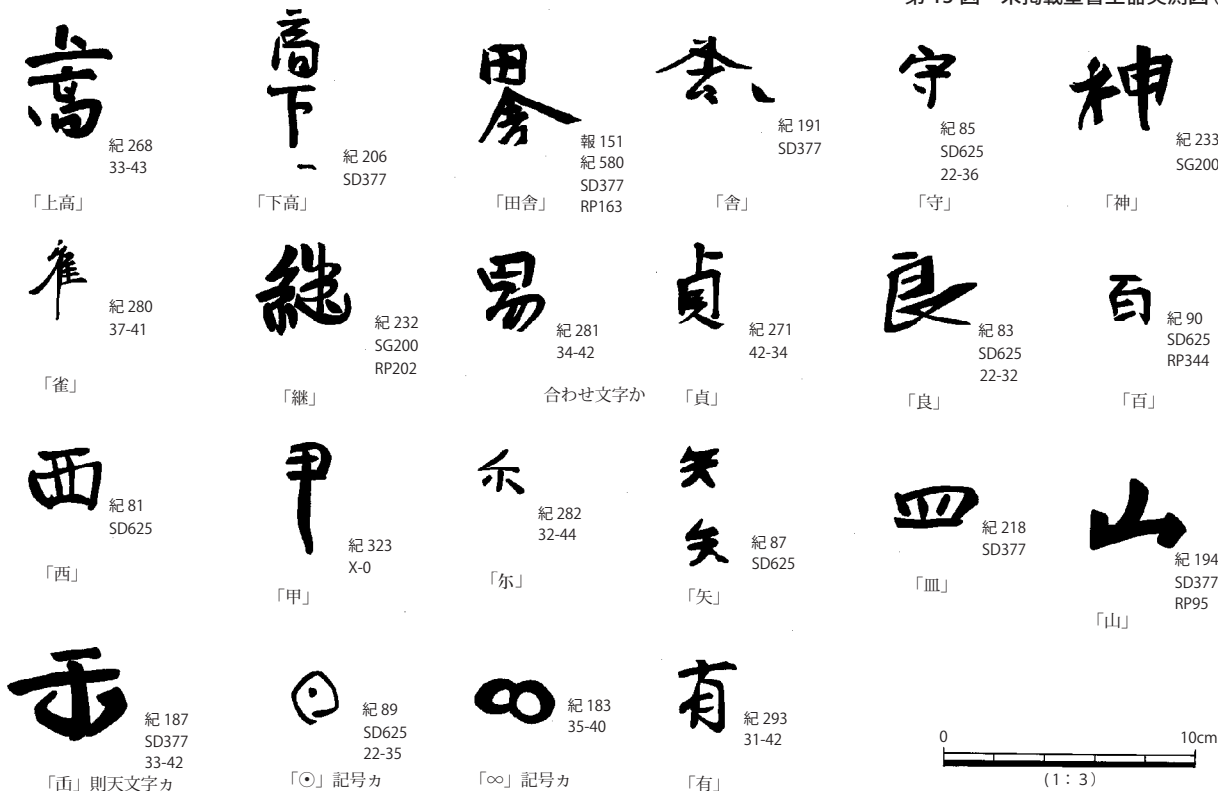
詳細は別稿に譲るが、同郡内では全体に総柱建物は2×2間の形態が一般的で、形態毎に規格性や集落構成等の相違等がみられた。以下に概略する。



第 12 図 未掲載墨書土器実測図 (1)



第 13 図 未掲載墨書土器実測図 (2)



第 14 図 未掲載墨書文字記号集成

A 総柱建物 (高床倉庫) 本遺跡では 2×4 間 (S B 2) の中型の総柱建物 (A 1 類: 以下、倉庫と記す) が検出され、柱根や根固石や支柱痕等も確認された。同形態・規模の建物は中山町達磨寺遺跡のみに認められ、S B 96 は全体に廂を持つ差異はあるが、規模的にはほぼ同規模の構造である。達磨寺遺跡は竪穴住居と併存する集落構成 (A 2 類) が本遺跡と異なるが、石帯や灰釉陶器、鍛冶遺構等の官衙関連 (官人層) 的な様相を呈する。

他方、それ以外の倉庫とその遺跡を概観すれば、前述小型の 2×2 間の形態が一般的である。これらには、基本的には集落が建物跡 (倉庫群) で構成され (竪穴住居が併存するが立地が異なるもの含む: 梅ノ木) ほぼ同規格の倉庫群が直列や L 字形に並ぶもの (B 類) があり、特に区画施設を有する一群 (境田 B・吉原 I・石田: B 1 類) 等もある。また、同形態ながら集落構成が竪穴住居等と併存し単体で検出されるもの (C 類) がある。この中には、建物跡の性格上、時期幅の検討は要するが、集落が建物 (倉庫) 群に後続 (9 世紀末葉) して竪穴住居に変移縮小するもの (漆山長表: C 1 類) や、併存し規格性が乏しい傾向のもの (一ノ坪: C 2 類) 等がある。他に大型のタイプ (D 類) もあるが、瓦を焼成した窯跡との関連が窺える (第 18・19 図)。

B 長舎建物跡 本遺跡の 2×5 間 (S B 3) が相当し、同形態の検出は山形市成沢遺跡 (S B 1・2) のみである。当遺跡は緑釉陶器等が出土し規模的にも大型である。長舎建物は、県内では『山形県の官衙関連遺跡』でも基準にした官衙的な遺跡に多く、官衙主体部である「政庁」や「館」、実務機関の「曹司」的建物と考えられる。

5 まとめ

本稿では今塚遺跡の特に溝跡の墨書土器と特徴的な建物群について再検討を加えた。以下に本遺跡の遺構と遺物の変遷、当時の最上郡の様相を整理してまとめる。

本遺跡の出現時期は、前述土器編年の I 期 (8 世紀後半～9 世紀初頭) と考えられる。しかし、量的に微量で遺構は判然とせず、S D 377・640 の溝跡が認められる程度である。墨書土器は「神」等がやや後れて (9 世紀初頭～前葉) 始めて散見される。周辺に古墳時代の有力遺跡があり在地勢力の成長が成因であろう。

I 期は、出羽国で宝亀の乱 (778 年) が起こり、国府

が秋田城から南下する段階 (延暦～弘仁年間) で、在地勢力の「復」(押切 2001) 等のため延暦 11(792) 年に最上郡の田租、弘仁 2(811) 年に調庸が免除される。一方でこの時期は本遺跡で確認される郡雑任「郡書生」が郡毎に規定 (822 年) され、郡衙正倉の倉庫群を各郷毎等に分散 (795 年)、収穫した近辺に小院設置 (823 年) 等が規定される。これらは全体に律令的制度により在地勢力が拡充した可能性を示し、次期以降に増加する本遺跡の一因になろう。

II 期 (9 世紀前～中葉) から墨書土器の量が一定量散見され、「高」や「王」、「八」、「守」等の限られた字種に多い。S B 1 (「宅」) が本段階頃と推測される。

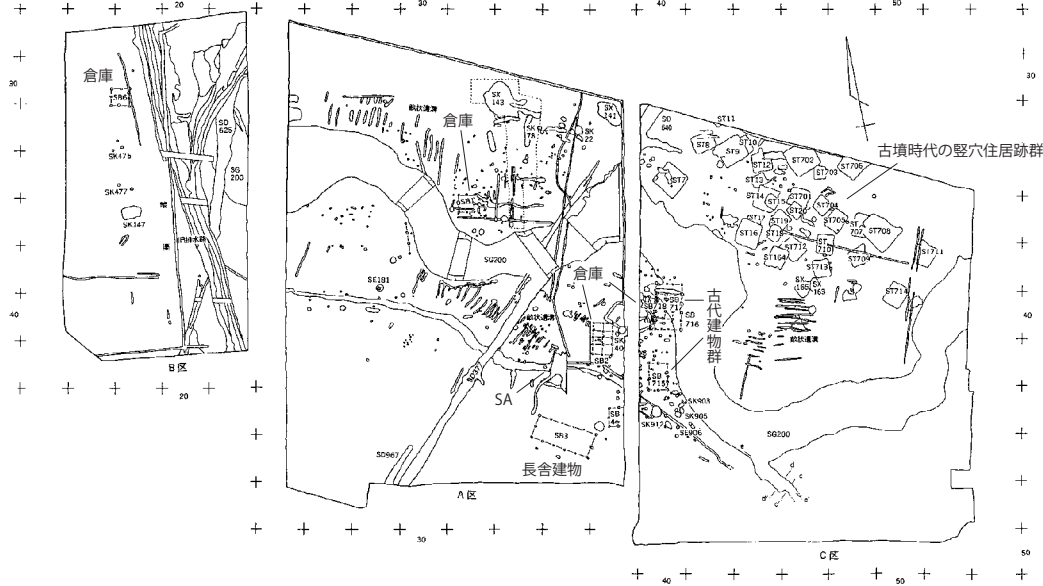
III 期 (9 世紀中～後葉) から多様な墨書土器群の増加が認められ、本遺跡の主体を為す段階と捉えられる。建物も S B 6 (「一麗」)・716 等で同時期の遺物が確認され、上記 S B 1 とほぼ主軸を南北軸に取る建物群や倉庫群 (S B 2 他)、S E 181 井戸跡等が II～III 段階で形成される。全体的には S D 377 溝跡も同様に当期で主体を為し、共伴する「調所」や「一等書生伴」もこの段階と考えられ、S D 967 の第 1 号木簡 (仁寿三年:853 年) が年代観を付与する。

II～III 期は、当国で地震 (830・850 年) や飢饉 (841 年)、鳥海山噴火 (871 年) 等の自然災害が続発し、承和 3(843) 年には倉庫内の調庸が欠け、「境接夷落」状態になる。これに行政は嘉祥 3(850) 年に租調の免除や、「倉廩」を開き (穀・穎の) 貸振、陰陽師の派遣依頼等で対処した。本遺跡の「調所」収納物もこれら災害に対応した事が推測され、本来蝦夷への夷禄等の「調」(穀・米) が、第 2 号木簡の兵士の食糧支給に変容した可能性がある。また、次期の陰陽道系と推測される「生・一麗」墨書土器群の祭祀も災害で困窮した社会背景の中で行われた事も考えられ、上記の関連が窺える。

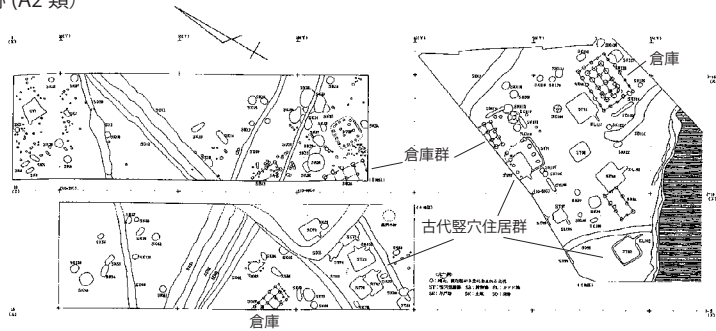
IV 期 (9 世紀後葉) は III 期より新相で出土量は III 期と同様である。S D 625 溝跡は III～IV 期に主体的で祭祀も当期の所産であろう。S D 377 も同時期まで機能する事が窺え、「田宅」・「田舎」墨書土器も確認される。他建物群と主軸を異にする唯一の S B 3 長舎建物は S D 377 とほぼ直交し、全体の土器出土量等と勘案すれば新相の建物と考えられ、上記墨書土器の可能性もある。

IV 期は本遺跡の最終段階に当たり、前期からの流れて

A類：2×4間総柱倉庫を有する遺跡
今塚遺跡 (A1 類)



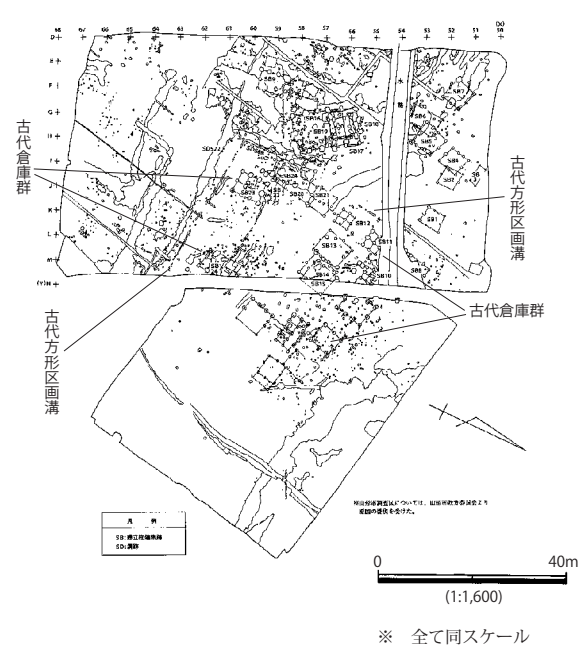
達磨寺遺跡 (A2 類)



B類：2×2間の総柱倉庫が列状にやL字型並ぶ遺跡
吉原I遺跡 (B1 類)

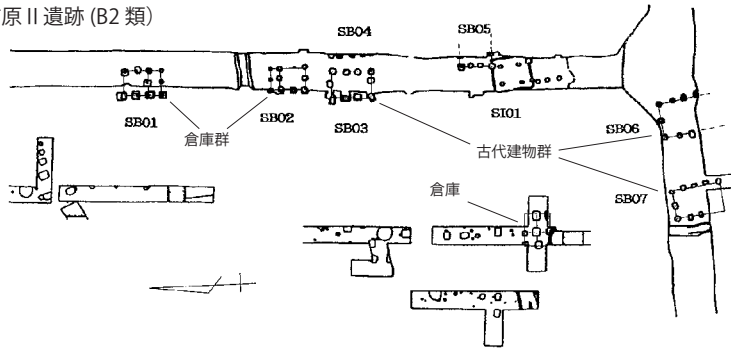


石田遺跡 (B1 類)

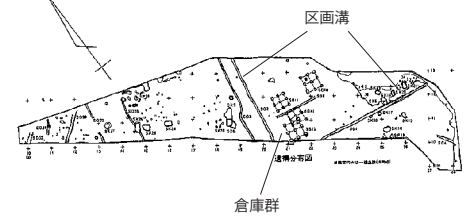


第 15 図 総柱建物（倉庫）を有する遺跡分類図（1）

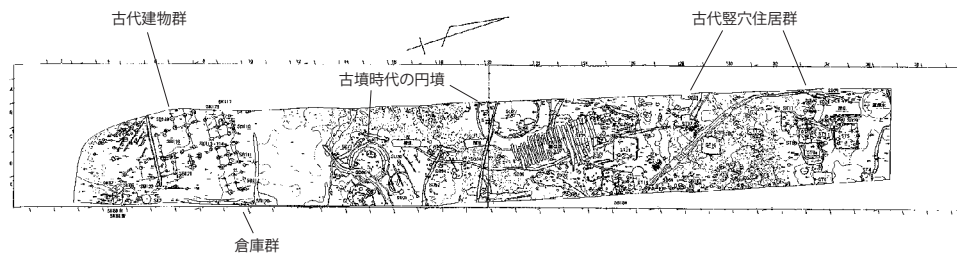
B 類
吉原Ⅱ遺跡 (B2 類)



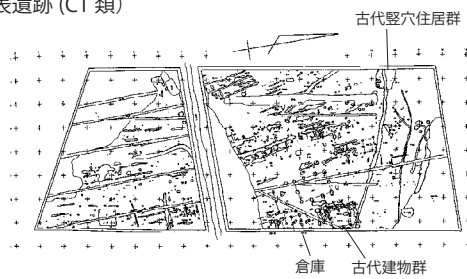
境田B遺跡 (B1 類)



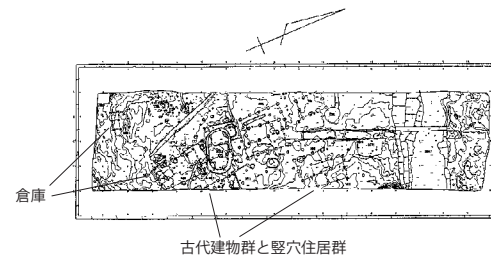
梅ノ木遺跡 (B2 類)



C 類：2 × 2 間の倉庫が単体で検出される遺跡
漆山長表遺跡 (C1 類)



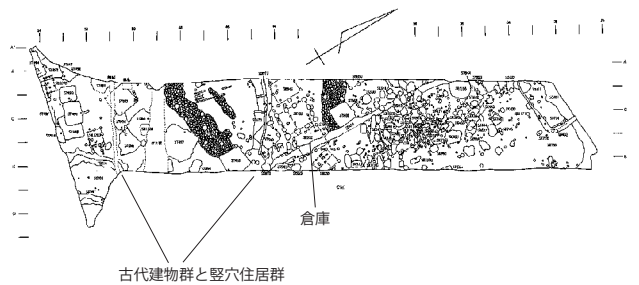
一ノ坪遺跡 (C2 類)



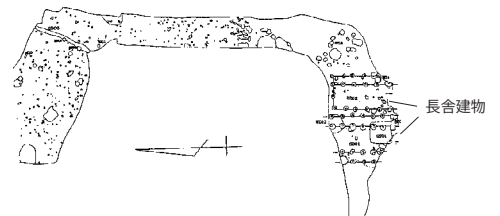
D 類：2 × 6 間以上の大型の倉庫のある遺跡
オサズ窯跡



永源寺遺跡 (C1 類)



長舎建物のある遺跡
成沢遺跡



0 40m
(1:1,600)

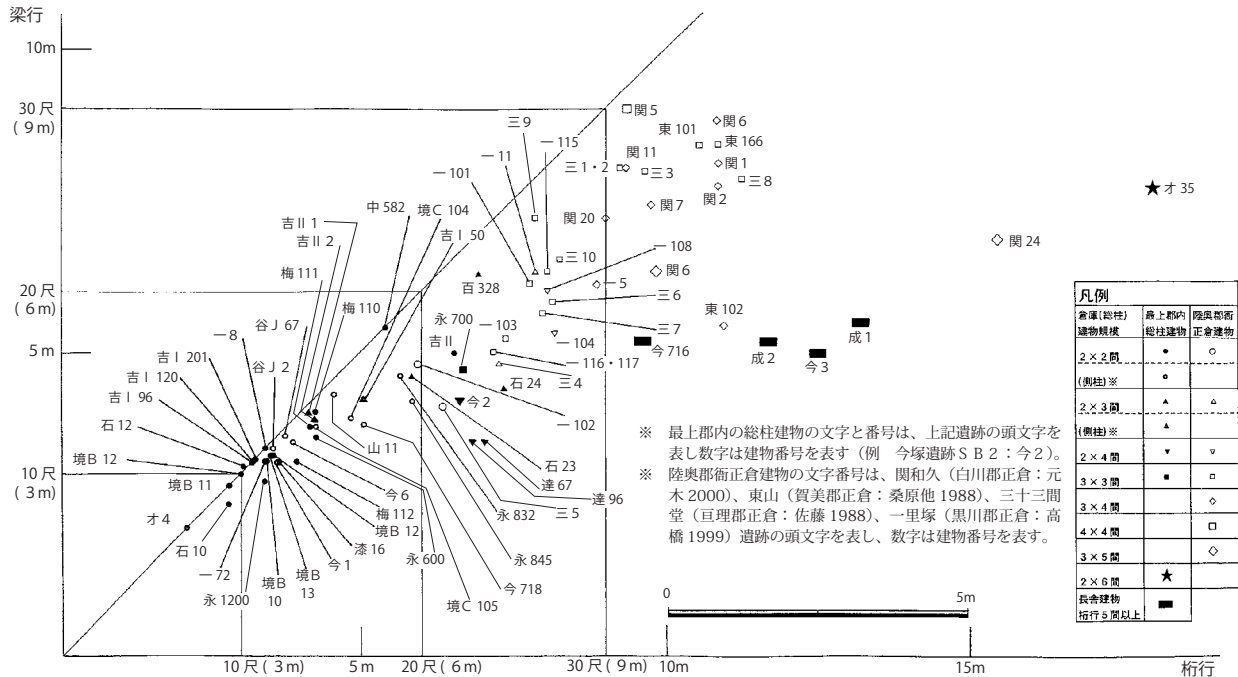
※ 全て同スケール

第 16 図 総柱建物（倉庫）・長舎建物を有する遺跡分類図（2）

今塚遺跡 (A1 類) | 達磨寺遺跡 (A2 類)

遺跡名	集落構成 ※1	建物 NO.	形 態 (間尺)※2	規 模 (m) 梁行 桁行	床面積 (㎡)	付 属 施設他	配 置 (主 SB 比)	SB 方向 (磁北)	主体時期 ※3	時期資料 ※3	備 考	報告書 ※4	年度	分類 ※5
今塚	SB のみ	SB2	2×4	4.2 6.6	27.7		併行	やや東傾	9C 中～後	SB 方向・溝土器	都符木簡・「調所」、 「一等書生伴」等の 墨書土器多数出土。	セン7	1994	A 1
		SB1	2×2※	3.6 3.3	11.9					EP 土器・SB 方向				
		SB6	2×2※	3.5 3.8	13.3					SB 重複・SB 方向				
		SB718	2×2※	5.0 3.8	19.0									
達磨寺	SB・ ST 共存	SB96	2×4	3.5 6.8	23.8	総廂	併行	やや東傾	9C 中～後	ST 土器・SB 方向	石帯・灰軸陶器出土。 鍛冶遺構多数検出。	埋文 104	1986	A 2
		SB67	2×4	3.5 7.0	24.5	東廂								
		SB36	2×4	8.8										
		SB95	2×3	5.2										
吉原 I	SB 集中	SB96	2×2	3.2 3.2	10.2		併行	ほぼ磁北	8C 末 ～9C 前	出土土器	方形区画溝 (約 80m) 有 SB96～201 の 3 棟直線 等間隔で並ぶ。	山形市 現説	1998	B 1
		SB120	2×2	3.2 3.2	10.2									
		SB201	2×2	3.2 3.2	10.2									
		SB50	2×2※	3.9 5.0	19.5	西廂								
石田	SB のみ	SB10	2×2	2.8 2.5	7.0		併行	ほぼ磁北	8C 末 ～9C 中	EP 土器・方向	方形区画溝 (約 55m) 有 SB10～12 L 字配置。 SB23・24 並列配置。 他に市教委調査実施。	セン 現説	2000	B 1
		SB11	2×2	3.5 3.3	11.6									
		SB12	2×2	3.1 3.0	9.3									
		SB23	2×3	4.6 5.8	26.7									
境田 B	SB のみ	SB24	2×3	4.4 7.3	32.1		併行	磁北	8C 末	区画溝土器	区画溝 (約 25m～) 有り。 SB10～13 L 字配置。 SB12・13 重複関係。	埋文 111	1987	B 1
		SB11	2×2	2.8 2.8	7.8									
		SB13	2×2	3.3 3.5	11.6									
		SB10	2×2	3.2 3.4	10.9									
境田 C	SB のみ	SB12	2×2	3.0 3.0	9.0		併行	磁北	9C 前	出土土器	2 棟が直線に並ぶ。 付符木簡、風字硯出土。	埋文 62	1982	B 2
		SB104	2×2※	3.9 4.8	18.7									
		SB105	2×2※	3.8 4.2	16.0									
		SB110	2×2	4.0 4.2	16.8									
梅ノ木	SB 集中	SB111	2×2	3.8 4.1	15.6		併行	磁北	8C 末 ～9C 前	EP 土器・SB 方向	SB110～120 直線 等間隔で 4 棟並ぶ。 SB119 と L 字配置。 8 世紀前～中葉 ST 有り	セン78	2000	B 2
		SB112	2×2	3.2 3.9	12.5									
		SB120	2×2	3.4										
		SB119	2×2	4.7										
吉原 II	SB 集中	SB1	2×2	4.0 4.1	16.4	南廂	併行	磁北	8C 末 ～9C 前	ST 重複・SB 方向	SB 1～4 同軸線上並ぶ SB 1・2 対面して廂付	山形市 現説	1998	B 2
		SB2	2×2	3.9 4.2	16.4	北廂								
		SB4	2×2	4.4		南北廂								
		SB	2×2	5.0 6.5	32.5									
漆山長表	SB 集中	SB119	2×2	3.3 3.6	11.9	西柱列	併行	磁北	8C 後～末	EP 土器・SB 方向	9 世紀後半 ST 有り SB700 床束有り。 SB700・832・845 が 並列。ST→SB 併行。 SB650・1200 方向異 なり規模小、中世か。	セン58	1998	C 1
		SB700	3×3※	4.8 6.6	31.7	南床束								
		SB832	2×2※	4.6 5.6	25.8									
		SB845	2×2※	4.2 5.8	24.4									
永源寺	SB 集中	SB650	2×2	3.6 4.2	15.1		不規則	やや西傾 やや東傾	不明	同軸溝跡土器・ SB 方向	不明	セン86	2001	C 1
		SB1200	2×2※	2.9 3.4	9.9									
		SB8	2×2	3.4 3.4	11.6									
		SB72	2×2	3.2 3.4	10.9									
一ノ坪	SB・ ST 共存	SB72	2×2	3.2 3.4	10.9		併行	ほぼ併行	9C 後 9C 前	SB 方向 ST 重複	他 SB・ST 同軸方向。 最終段階、大型 ST 移行	セン78	2000	C 2
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
山形西高	SB 集中	SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4		併行	ほぼ磁北	8C 末 ～9C 前	出土土器	ST 主体で SB 集中域有り 県現説	1997	C 2	C 2
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
		SB11	2×2※	4.3 4.5	19.4									
谷柏 J	SB・ ST 共存	SB2	2×2※	3.3 3.5	11.6		不規則	やや東傾	8C 末 ～9C 初	EP 土器	小型 SB 多い。 中世遺構有り。	セン96	2002	C 2
		SB67	2×2※	3.6 3.7	13.3									
		SB325	2×3※	3.2 5.3	17.0									
		SB326	2×3※	4.9 6.0	29.4									
百目鬼	SB・ ST 共存	SB327	2×3※	4.8 6.3	30.2		不規則	東傾 東傾 ほぼ磁北	9C 後 ～10C 初	出土土器	SB325～327 は一部 柱穴欠落し、方向散在	セン96	2002	C 2
		SB328	2×3	6.3 6.9	43.5									
		SB328	2×3	6.3 6.9	43.5									
		SB328	2×3	6.3 6.9	43.5									
中袋	SB のみ	SB582	2×2	4.2 4.4	18.5		不規則	やや西傾	9C 後 ～10C 初	グリッド土器	石帯・灰軸・硯・溝跡	セン97	2002	C 3
		SB582	2×2	4.2 4.4	18.5									
		SB582	2×2	4.2 4.4	18.5									
		SB582	2×2	4.2 4.4	18.5									
樋渡	SB のみ	SB95	2×3※	4.1 4.3	17.6		不明	やや東傾	9C 後	出土土器	SB 一部柱穴欠落。緑釉	セン96	2002	C 3
		SB95	2×3※	4.1 4.3	17.6									
		SB95	2×3※	4.1 4.3	17.6									
		SB95	2×3※	4.1 4.3	17.6									
オサヤズ 竈跡	SB のみ	SB4	2×2※	2.1 2.1	4.4		不規則	ほぼ磁北	不明	瓦出土 出土土器	瓦竈跡検出。 中世遺物有り。	セン72	2000	D
		SB4	2×2※	2.1 2.1	4.4									
		SB4	2×2※	2.1 2.1	4.4									
		SB4	2×2※	2.1 2.1	4.4									

第 19 図 古代最上郡の倉（総柱建物等）の形態と規模



第 20 図 総柱建物倉庫と長舎建物の形態比較図

元慶の乱(878年)が起こり、仁和3(886)年には最上郡が村山郡と分郡され、人口増加や田地開発に伴うものと推測される。本遺跡の最終末は概ねⅣ期以降、急激に希薄になり前述両溝跡の覆土に砂を含む事から河川の氾濫等による移転や廃棄が考えられる。

一方、本遺跡の具体的な性格は、一連の墨書土器や木簡等の遺物相、同郡内で単体で比較すれば特異な形態の総柱建物(倉庫)や長舎建物の遺構群等の構成から、報文でまとめた「一般農村と規定するよりは役所的な機能を備えた集落、或いは祭祀関連の集落」と捉えられる。

更に本稿の遺物再検討や隣国郡倉等の遺構群と比較した結果、『一般的な郡倉群よりは下位レベルで穀類(約千斛)⁷⁾を収納した「役所(郡の特別倉庫:調所)的な機能を備えた」郡司以下の郡書生が複数活動し「祭祀」活動も行う官人層の「集落(居宅)」』と考えられる。

具体的な官人層は不明だが、「郡衙の出先機関(山中1994)」的な「調所」(倉庫)と「田宅」・「田舎」⁸⁾(居宅)を合わせ持つ存在の在地豪族で、墨書土器群にやや年代幅があり出土量が多い「高」に関わる人物と判断する。

最後に墨書土器の観察、釈文に当たって三上善孝氏、

北野博司氏、村木志伸氏、齋藤俊一氏、伊藤邦弘氏、押切智紀氏に御協力、御指導を得た。また本稿を作成するにあたり佐藤庄一氏、須賀井新人氏には多大な御指導を受けた。記して感謝を述べたい。

註

- 1) 「報」は報告書の遺物番号、「紀」は紀要番号を表す。
- 2) 報告書の土層断面等から一連のものと判断される。
- 3) 押切智紀氏の御教示による。
- 4) 報告書では明らかな建物として9棟としたが、S B 3の北西、ほぼ同方向の全て礎板を持つ3基(S P 43他)の柱穴からなる建物の可能性もある柱列(S A)が検出されている(第15図)。
- 5) 側柱建物でも2×2間等の方形形態を倉庫として抽出した。
- 6) 特に総柱建物は所謂郡倉との比較から隣国陸奥国の主な郡倉院と推定される遺跡の総柱建物(礎石含む)も併記した。
- 7) 村松恵司氏(松村1998)は文献史等との比較により床面積から収納量を指摘する。
- 8) 「田舎」は「城堡」で著名な『軍防令』東辺条の「堪営作者」義解に見え、土器年代は異なるが遺跡の性格上示唆的である。

引用文献

- 阿部明彦 1998「庄内平野の様相」『第24回古代城柵官衙遺跡検討会』
 阿部明彦 1999「山形県の古代土器編年」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
 伊藤邦弘・植松暁彦 1999「山形県の官衙関連遺跡」『第25回古代城柵官衙遺跡検討会』
 井上光貞他 1976『律令』岩波書店
 植松暁彦 1997「庄内高瀬川と月光川流域の平安時代の集落変遷について」『山形考古第6巻』
 岡田荘司 1994「陰陽道祭祀の成立と展開」『平安時代の国家と祭祀』続群書類従完成会
 尾形興典 1998『山形県内出土古代文字資料集成』山形県の古代文字資料を考える会
 押切智紀他 1997「出羽国設置と米沢」『米沢市史』
 押切智紀 2001『永源寺跡遺跡発掘調査報告書』(財)山形埋蔵文化財センター
 柏倉亮吉他 1979「出羽国府の整備と郡衙制」『山形県史』山形県
 加藤稔他 1996『図説山形県の歴史』河出書房新社
 金子裕之 1999「仏教道教の渡来と蕃神崇拜」『古代史の論点5』小学館
 北村優季 1997「律令国家と出羽国」山形考古学会発表要旨
 木元元治他 2000「陸奥国南部各郡の資料 白河郡」『第26回城柵官衙遺跡検討会』
 桑原滋郎他 1988『東山遺跡Ⅱ』宮城県多賀城跡調査研究所第12冊
 佐藤庄一 1998『平野山古窯群跡第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター
 佐藤則之他 1988『亘理町三十三間堂遺跡』宮城県教育委員会第27集
 佐藤信 1977『日本古代の官都と木簡』吉川弘文館
 渋谷孝雄 1982『境田C遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
 須賀井新人・植松暁彦 1994『今塚遺跡発掘調査報告書』(財)山形県埋蔵文化財センター第7集
 高橋栄一他 1999『一里塚遺跡第44・47次発掘調査報告書』宮城県教育委員会第179集
 仲野博他 1999『古代出羽文献・出土文字資料集稿』東北芸術工科大学歴史遺産研究協議会
 平川南 2000『墨書土器の研究』吉川弘文館
 松村恵司 1998「正倉の存在形態と機能」『古代の稲倉と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所
 水野正好 1997「都市と流行する病(1)」『信仰関連遺跡調査課程』奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター
 山中敏史他 1998『律令国家の地方末端支配機構をめぐって』奈良国立文化財研究所
 山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』株式会社塙書房
 横山昭男他 1998『山形県の歴史』山川出版社